

若者たちの太陽

眼下に渋谷の街を睥睨しながら、岡本太郎の最高傑作は日々30万人と対峙している。長らくメキシコで行方不明になっていた幻の大壁画『明日の神話』である。

2003年にメキシコシティ郊外で発見されたときには崩壊寸前だった。その後日本に移送され、1年に及ぶ修復作業を経て2006年夏に初公開、2008年秋に渋谷駅に嫁入りした。波乱に満ちた道のりであった。

描かれているのは原爆が炸裂する悲劇の瞬間だ。中央には核に焼かれて燃え上がる骸骨。巨大画面を圧して広がる鮮烈な炎。強烈な原色が見る者を圧倒する。

だがこれは惨めな被害者の絵ではない。残酷で凶悪な力と同じだけのエネルギーをもって人間の誇りもまた炸裂する。その瞬間に「明日の神話」が生まれる。そう信じた岡本太郎の美意識が凝縮されている。だから作品全体が気高く、美しい。

しかも幅30m、高さ5.5mというサイズは一般的な「絵画鑑賞」とは質が違う。まさに“浴びる”感覚だ。

驚くべきはスケールやモチーフだけではない。国を跨いだ巨大壁画の再生という一大プロジェクトのすべてが作家の死後の出来事なのだ。それを「人生最後の仕事」と語っていた太郎のパートナー・岡本敏子の決意と覚悟が人々を渦に巻き込み、いつしか大きなうねりとなってこの難事業は実を結んだ。浄財を寄付した者も万の単位に及ぶ。

無数の人々が壁画の再生を願い、その一端を担いたいと考えた。この壁画を必要としたのは作家本人ではなく、いまを生きるぼくたちなのである。

中心にいるのは若者たちだ。「エネルギーをもらいました」「これで一歩前に踏み出せそうな気がします」「壁にぶつかったらまた来ます」……。岡本太郎記念館のスケッチブックには彼らが残した言葉が並ぶ。

空間メディアプロデューサー・
岡本太郎記念館館長

平野 暁臣



先が見えず閉塞感に包まれた時代。自らを覆う分厚い雲を太郎が切り裂いてくれる。一筋の光がさしてくる。希望と勇気が湧いてくる。きっとそう感じているのだろう。岡本太郎は彼らにとっての太陽なのだ。

かつて太郎はこう言っていた。

「芸術は太陽と同じだ。太陽は熱も光も、無限に与える。ひなたぼっこしても、“おい、あったかかったろう。じゃ、いくら寄せせ”なんて、手を差し出したりしないだろ?」

『明日の神話』の前で“熱”を浴びる若者たちを見て欲しい。みな嬉しそうで、少しばかり誇らしげだ。

彼らは太郎のメッセージを皮膚感覚で受け取っている。岡本芸術を貫く基本哲学。それは自由、尊厳、誇りだ。“若者たちの太陽”が放射しているのは、時代に傷つけられたこれらの感覚なのである。



平野 暁臣（ひらの・あきおみ）

空間メディアプロデューサー・岡本太郎記念館館長。ゼネラルプロデューサーとして『明日の神話』再生プロジェクトを統括。著書に『岡本太郎—太陽の塔と最後の闘い—』他